

---

# 篠原教授のレポート

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

篠原教授のレポート

### 【Nコード】

N3837T

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

骨格部分だけを取りあえず小説形式にしてみた。もっとこのテーマは掘り下げられるべきだと思う。著作権と絡めて。

「教授！」

振り向いた先にはにこやかな青年。

「珍しいですね、キャンパスでパソコン開いてらっしゃるの、初めて見ました。」

「そうだろうかね？」

「そうですね、お茶の時間はお茶を楽しむとか仰ってるじゃないですか。」

大学食堂のテラスは、まだ肌寒いこともあって他の人は居ない。考える時間にはちょうどいい。

「そうだ、佐久くん。君はネットで創作活動などはしないかい？」

「そうですね・・・ブログをやった事もありましたが、すぐに飽きましたね。」

「君はアウトドアだったか。」

わたしが肩を竦めると、彼はにっこりと返す。どや、と。

「それがどうかしたんですか？ 新しい研究テーマだとか？」

「その通りだよ。ちよつと面白い事象を見つけたような気がするんだ。」

「気がする？」

頷いたわたしに、彼は怪訝そうだ。

「君は盗作という言葉を知っているかい？」

「知っていますよ。著作物から違法にコピーをすることです。」

「そうだね・・・ところで、人はなぜ、不正といわれる手法に走るのだろうかね？」

「なぜと言われましても・・・。」

「そして、不正を行った者を殊更に責める者たちの存在。」

「はあ。」

「彼等の執拗さは、わたしの目から見ると異常の範囲だ。これはま

た別の意味合いでの興味を掻き立てるが、彼等もなぜあそこまで執拗であり続けられるのかが不思議だ。」

「正義と、義務感じゃないですか？」

「正義、義務、それだけであそこまで精力的に動けるとは思わないね、わたしは。」

「では何だと？」

「名誉欲、自己顕示欲、そういった類でまず間違いあるまい。」

時に、わたしのように学術的興味を示す者も多いだろう。その場合は、両者の奇妙さを見逃すはずはないと思うよ。」

「なるほど……。自身にはさして人より秀でた部分がない場合、あるいはそう自己評価を下している場合には、それ以外の手法で欲求を満たそうとしますね、確かに。」

「自身には胸を張れる要素がないと思っっている時、そういう人間のマイナス感情というものは、どうしても端々に滲んでいるものだ。」

それが、責める者たちの攻撃的な文面に如実に表れるのだと思う。」

「潔癖症と疑うやり取りの中には見られるかも知れませぬ、病的、  
というか……。」

「責める側には多分に、そういうメンタル不全の兆候があるのが面白ところさ。余裕がないのだろう。」

多くの人間は事実を知っても騒ぎ立てない。関わろうとしない。面倒だからだ。」

それはそれで面白い事象だと思うし、折を見て分析してみたいとも思うが……。知った以上は我慢がならない、という人間が居てね。これが、とても面白いと思うんだ。あの使命感は何を原因とするのか？」

「盗作する側ではなかったんですか？」

「わたしの興味の対象かね？」

「ええ。」

「いや。むしろ、盗作という一連の事象に含まれる全ての要因に対しての興味、だね。」

自身の劣等性の隠れ蓑とするケース、メンタル障害を疑うケース、いずれも形が違っていただけで両者に共通する。」

「盗作する側の事情ですか・・・、自身の創作に対する劣等感が強ければ他者から盗んででも、と考えてしまふんでしょうか。」

「自己顕示欲や名誉欲は、裏返せばまた劣等感に戻ってくる事柄だ。自身を劣等と感ずる者ほど、先の欲求が激しいのだよ。実は両者はそういう意味合いに置いて、同類なのだ。」

「同属嫌悪、という側面もありそうですね。」

「実は両者共に、相手は”鏡に映る己”と言えるわけだからね。しかも、方向性は逆を向いているから、その反発はとても大きいのだらう。」

「うん・・・。」

「さて、わたしは大体の構図というべき部分はこれで合っていると思っているが、細かい部分・・・特に、盗作を決意させる要因については疑問符なのだ。」

なにが彼を、一線を越える決断へと導いたのだらうか？」

「知らなかったから・・・とは、言えませんよね。」

「もちろんだ。実情を知らなかったというケースは全体のうちでも極少数だらう。」

多くは、この実情を十分に理解した上で実行に移したものと思われる。この、酷いバッシングを承知でなお手を出したとすれば、これは正常な思考ではあり得ない。

・・・自分だけはバレない、という奢った判断は、なんらかの要因あつてこそ生み出された物のはずだ。

それは、盗作の判定基準の曖昧さであり、この曖昧さにおいては大元の著作権という権利そのものに責任を求めるべきだらう。

著作権は、非常に恣意的な権利だからね。

著作権自体にある不平等性、不透明性、人々の感じる法としての不整合がそもそもの原因だ。」

「よく解かりません。」

彼はもうこの話題に興味はなさそうだった。

開放してあげることによろう。

「少しお喋りが過ぎた。君は戻りたまえ。わたしも引き上げるとしよう。」

彼の眠たげな目がぱっと見開かれた。

「はい、失礼します。教授。」

(後書き)

<書き損ねメモ>

大量の文章を読み込んで、大量に文章を書き出して、それらが自身のものだか他人のものだかを完全に掌握出来るものだろうか？

脳の障害に分類されるのだろうか、盗作者にはある種の共通点があるような気がする。

そしてむしろ、障害と見る場合には被疑者よりもむしろ弾劾を行う者の精神の方に危うさを感じる事が多々である。

他者の意見も聞きたいところだ。盛り上げればいいのにと残念に思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3837t/>

---

篠原教授のレポート

2011年10月9日02時42分発行